



▶ 第2話 ◀

丹後体験ツアーを作ろう ―うちのまちは、本当に何も無いのか?―



デザイン棟（三河内）で手織り体験をする高校生

豊かな自然と、そこに根ざした産業、歴史文化や人のあたたかさ――。私たち3人は、高校生向けの丹後体験の旅を企画してきました。「スタディーツアー」と呼んでいます。同じ高校の仲間たちとオンラインワンの丹後の魅力をシェアすることが目標です。ツアーを通じて見えてきたのは、身近なまちに広がるまだ見ぬ世界でした。【宮津天橋高校宮津学舎3年・平田えみ、黒田倅大、木村虎太郎】

ええとこいっばい
あるんやでえ

ガチャン、ガチャン……。自動織機の中をシャトルが右から左、左から右へと何度も行き交います。ここは京丹後市峰山町の機屋。代表の吉村隆介さん（47）は、機織り体験をする私たちを見ながら言いました。「高校生がわざわざ来てくれてうれしいなあ」。与謝野町でチョコレートを製造する矢野裕亮さん（42）は「君たちくらいのときに地元のことを知ったらどんなにかかっただろう。うらやましいなあ」と話していました。

私たちがスタディーツアーを企画し始めたのは、2021年春。受入先のアポ取りや準備・告知・運営まですべてを自分たちでやりました。



織機の扱い方を教わる高校生（京丹後市内の機屋）

8月は京丹後市で、12月には与謝野町で。「与謝娘酒造」「シオノ鋳工」「かや山の家」「デザイン棟」「ローカルフレッジ」を巡りました。

お世話になったのは建築業や家具作り、農業に織物業、鋳造業に酒造り、地域密着型のサービス業などなど。ホームページにあった連絡先に飛び込みで電話をしたのにもかかわらず、ころよく時間をつくってくださいる姿から、私たちに丹後で働くおもしろさを伝えようとしてくれていることがわかりました。

社会人のみなさんに聞きたいことがあります。進学や就職で丹後を出て「どこ出身？」と尋ねられたとき、どのように答えていましたか？

正直な話、私たちも同級生も、生まれ育ったまちをネガティブに捉えていました。友達と進路の話をする「丹後みたいなのもあらへんど田舎、はよ出ていきたいよな」という会話になります。私たちが全校生徒に実施したアンケートでも「将来は地元でUターンしたい」と答えたのは全体の3割程度。回答の中には「丹後に将来性を感じない」という声もちらほらありました。

だから、大人の多くも「丹後はもう衰退していく運命しかない」と考えて

いると思っていました。でも、スタディーツアーを受け入れてくださったみなさんは幸せそうで、楽しそうで、輝いて見えました。その姿を間近にして、私たちの中にある「丹後観」は揺れ始めました。

参加した高校生は延べ29人。「何もないと思っていた丹後がどんどん魅力的なまちに見えてきた」「丹後ちりめんが世界に誇れるすばらしいものだ」と知ることができた」などの声が寄せられました。受入先のみなさんは、私たちの話をうれしそうに聞きながら、「わしも外に出て初めて、丹後の良さに気づいたんだ」「人のつながりが強くて、ご飯が美味しくて、自然が豊かで、歴史が深く……こんな場所はなかなかないよ」と話してくれました。



平田 えみ
（3年・峰山中出身）

実は、知らないだけかも

丹後で生まれ育った私たちはまだ、他のまちと故郷を比べるモノサシを持っていません。高校を卒業して、遠くのまちに住んでみて初めて地元の良さがわかるのかもしれない。そのためにも、まずは丹後がどんなまちなのか、どんな人たちによってできているのかを知っておい

た方が良いと思うのです。

高校生は世の中のことを知らないし、柔軟な考え方をするのは難しく、希望や夢を持ちながらも、焦ったり不安になったりを繰り返しています。もがいています。大人のみなさんも、私たちの前では見せていないような苦しいこと、困ったことも経験しながら今があるのだろーと思

います。だから、地元で働くみなさんは私たちにとって頼れる大先輩です。良いところも悪いところも含めて、私たちに丹後のことを教えてほしい。スタディーツアーは、世代を超えて丹後をつなぐ架け橋です。この連載を読んで「うちにもきてーな」と声をかけてくれる方が現れることを願っています。

今回は「丹POPPO女子が見つけたこと」です。お楽しみに！

ツアー動画公開中



鋳物体験



シーカヤック体験



農業体験

ツアー動画は二次元コードから。



最後まで読んでいただき、ありがとうございました。私たちの活動についてご意見をお聞かせください。どんな意見でも構いません。以下の二次元コードからご回答いただけます。



【ロゴ・動画作成】
黒田倅大、木村虎太郎